

## ちいさな証

## 独りぼっちの私に神様がお与え下さったもの

エシェバッハー池田喜美子

スイス日本語福音キリスト教会



私は、この世に生まれて、すぐに神様のお恵みをいただいた幸せものです。私の生母は跡取りの息子を欲しいと願っていたのですが、女兒ばかり生まれ、三番目の私は未熟児で誕生し、成長は無理と云われて放置されてしまったのです。それを知った生母の両親は、主イエスを信じる二人でしたので、せめて天に召されるようにと、私を抱いて教会に行き、幼児洗礼を授けていただいたのです。神様は、ただ眠っている幼子を哀れに思われたのでしょうか、生命の息吹を吹き込んでくださいました。それゆえ私は生き延び、太平洋戦争の最中にも、空腹は覚えても、神様の存在は信じていたので不安な思いはした事はありませんでした。成長していくにつれ、神様にいただいた生命を大切に、御心に沿い、主の力に寄り添って生きたいと願っていました。

学校を卒業し仕事を始めてからは、夜は東京・神田にあったYMCAで紙芝居を制作したり、人形劇団のための人形を作って、同年輩の仲間と慰問訪問などをして奉仕に明け暮れたものでした。特に懐かしいキャンプでは、満天の星空の下で大きな輪になって焚き火を囲み、そんな時、日中のいたずら連中が神妙な顔つきをして、罪を告白したのがとても印象に残っています。

私の夫となるワルターと出会ったのもYMCA時代でした。二年の文通を経て、私は、「いつか獣医になる」そして「孫が授けられたら動物園めぐりをする」という夢を抱いてスイスという全く未知の国に来てしまったのです。しかし獣医になる夢は消え去り、新しい人生を歩むうちに夢のことは、日々の生活の中で遠くに去っていきました。

それから安定した年月が過ぎました。そうしたある日、健康だったワルターは、体についた吸血虫の発見が遅れ、脳の働きが止まり、悲しい出来事が次々と起こって、ついに天に召されていきました。残された母娘は、その後も私たち3人の願いであったスイス原産の小さな草花や鳥虫蝶、その他の弱い小動物を保護する暮らしを続けてきました。20年余り経った頃でしょうか、ある日、娘も健康な体のまま眠り続けていましたが、そのまま息が止まって、私の傍から天に飛び去ってしまいました。そうして孫との動物園めぐりの夢も消え、私は本当に独りぼっちになったのです。

夫と娘という人生の支えであり、愛情を注げる対象を失った私に、長年の親友のスイス婦人がツィター（弦楽器）を私にくれました。彼女は一緒に奏でようと、私に根気よく手ほどきをしてくれました。私はそのツィターに夢中になって日々を過ごしました。また、友人は彼女の飼う犬と散歩することもすすめてくれました。その犬と連れ立って森の中での散歩は私の精神の安定に役立ったようです。

可哀想なのは酷使されてきたツィターで、よれよれになり2、3の弦は未だに満足に調弦できずにいるのです。習った楽譜の枚数が20枚を越え、約一年が過ぎて、私は何となく一人での生き方を見つけたようです。ツィターのために沢山の曲を知ったのですが、その中には教会でもよく歌われる賛美歌や、幼い頃、日本で覚えたような原曲もあって、落ち込みそうになるとき、そのメロディーは私を慰めて勇気付けてくれました。

長い間、神様は私のような者にもお恵みを与えてくださり、朝に晩に、お礼と罪の赦しを請うお祈りをし、毎日、感謝しつつ生かさせていただいています。なにかにつけて欠点の多い私ですので、誤った行為やいびつな考えにお詫びし赦しを願う習慣は欠かせないものとなりました。過ちや失敗した事は数え切れない程ですので、神様の力をお借りして、その失敗を踏み台にして生きることができるようになりました。

一段上って今まで見ていなかったところを眺めると、そこには思いがけない世界がひろがっています。それに気をとられていますと、いまままで私を悩ませていたヤキモチや自己憐憫などの感情は消えて行き、いまままで悪く解釈していた事柄も、もう一度よく見直すと、私を訓練する良き事柄にとれるようになると気がつきました。そうするうちに気も晴れ、失敗の踏み台さん、ありがとう、そんなことを気づかせてくださったイエスさま、ありがとうと言いたくなるのです。

振り返れば、確かに悲しい出来事が度々起き「神様、なぜですか」と問う人生でもありましたが、ここに書ききれないほど家族との楽しく忘れ難き思い出も心の中に生きて宝となっています。全ては神様の手の中にあり、私はその神様に縋りながら残りの人生を全うしたいと願っています。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。」ローマ人への手紙8：28



筆者の絵

